第３回常若講座

古事記を読む　其の２

国生み②

令和７年４月29日（火）

●若宮八幡社を遥拝

講座①　神社検定問題集（過去問題集）から問題

◆初級

天と地が初めて開けたとき、高天原（たかまのはら）に最初に現れたのは【　　】です　この神様は、天の中心の神様です

1，天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）　2，高御産巣日神（たかみむすひのかみ）　3，神産巣日神（かみむすひのかみ）

◆３級

八幡神の起源は【　　】です　第29代欽明（きんめい）天皇の時代（西暦539～571年）に遡るともされます

1，石清水八幡宮　2，鶴岡八幡宮　3，宇佐神宮　4，手向山（たむけやま）八幡宮

◆２級

伊勢神宮のすべての社殿と御装束神宝を新たにする至高の祭典「神宮式年遷宮」は、内宮は【　ア　】４年（西暦690年）、外宮は同６年（692年）に第１回が斎行されている　20年に一度の重義である神宮式年遷宮は、大【　イ　】とも呼ばれる　神威の一層の高まりを願う式年遷宮は、スケールの大きな【　イ　】と言えるのだ

1，天智天皇　2，天武天皇　3，持統天皇　4，文武天皇

A，例大祭（れいたいさい）　B，祈年祭（きねんさい）　C，新嘗祭（にいなめさい）　D，神嘗祭（かんなめさい）

◆１級

天皇陛下が即位の年だけに斎行される「大嘗祭・だいじょうさい」のうち献納されるお米の産地を選定する神事「齋田点定の儀」では、どの範囲を齋国にするかについての決まりがあり、【　ア　】以東を【　イ　】地方、【　ア　】以西を【　ウ　】地方として勅定され、平成度に於いては、秋田県が【　イ　】地方に、大分県が」【　ウ　】地方に決まりました

正解は……　ア、京都府　イ、悠紀（ゆき）　ウ、主基（すき）　です

講座②　古事記を読む　其の２【国生み②】（別紙で勉強していきます）

第3回常若講座 資料

講座② 古事記を読む 其の2【国生み②】

淤能碁呂島（おのごろしま）の段（くだり）

此処に天神 諸 の命以て、伊邪那岐神、伊邪那美神、二柱の神に、この漂える国を修理り固め成せと詔りごちて、天沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。 故、二柱の神、天浮橋に立たして、其の沼矛を指し下して画き賜へば、塩こをろ こをろに画き鳴して、引き上げ賜ふ時に、其の矛の末より垂落る塩、累積りて島と成る。これ淤能碁呂島なり。

◆現代語訳文

さてそこで、天つ神の、諸々の神々のお言葉で、伊邪那岐・伊邪奈美のお二方に向かって、『この漂っている国を治めなさい』と仰せになられ、天沼矛をお授けになり、ことを委ねられた。そこで、お二方は天の浮橋にお立ちになり、その沼矛をズズッと下に向けて指し下して、流れ漂っている海と泥との混じる塩をコヲロコヲロと掻き回し掻き鳴らして引き上げなさるその時に、沼矛の先から滴り落ちた塩が、重なり積りに積もって島になりました。これが淤能碁呂島なのじゃ。

◎Keyワード

①天つ神　②修理固成　③こをろ こをろ

美斗能麻具波比（みとのまぐわい）の段（くだり）

其の嶋に天降り坐して、天之御柱を見立て、八尋殿を見立て賜ひき。 是に其の伊邪那美神に「汝が身は如何に成れる？」と問い賜へば、「吾が身は成り成りて、成り合わざる処、一処在り」と答日し賜ひき。 伊邪那岐神詔り賜ひつらく、「我が身は成りて、成り余れる処、一処在り。 故、此の吾が身の成り余れる処を、汝が身の成り合わざる処に刺し塞ぎて、国土生み成さむと為ふは如何に」と詔り賜へば、伊邪那美神「然か善けむ」と答日し賜ひき。

◆現代語訳文

そこで、伊邪那岐・伊邪奈美のお二方は、その淤能碁呂島に天降りなさって、（世界の中心を象徴する）天の御柱を見立て、八尋殿をお見立になられた。そして、伊邪那岐神は、伊邪奈美神に『お前の体はいかにして出来ているのか？』とお尋ねになられ、すると答えて、『私の体は成り成りて、成り合わないところが一ヶ所あります』とおっしゃった。それを聞いた伊邪那岐神は、『わが身は、成り成りて、成り余っているところがひとところある。そこで、このわが身の、お前の成り合わないところに刺し塞いで、国土を生みなそうと思う。生むことは如何に？』とお問いになられた。すると伊邪奈美神は、『それは、とても楽しそうね』とおっしゃった。

◎Keyワード

①天之御柱　②八尋殿　③生み と 産み

『国生み③・大八島國（日本国全体）成り出の段』を紐解いていきます

次回、第4回常若講座は、七月下旬（予定）にて…

①白すす（白・白状・白髪・白…）　②大占　③上相（ぜ）

◎ヒゲ・ムーブ

それで、どうにもよく手へ事が運ばなかったので、おニ方は話し合われました。『我ら生まれて、『今、我ら生まれて、『今、天つ神のもとに出向いて申し上げ、尋ねよう』ぞ『伊邪那岐神がおっしゃって、すぐさま運れるすると天つ神は太占（ふとまに）で占い合わせて、その結果を請われたのしゃった。為されるには、『女が先に誘いを掛けたのが良くないのだ。今のままだと不ご帰り、改めて言い直しなさい！』とおっしゃったのだ。

◎ヒゲ・ムーブ

①白すす（白・白状・独白…）　②大占　③上相（ぜ）に…

是に伊邪那岐神、「然らば吾と汝と、是の波比為なる」と詣り賜ひき。　斯へ言い期りて、是の より廻り逢はむ」と詣り賜ひき。　然りて、乃ち「汝は右より廻り逢へ。　吾は左り しそなたちと言い賜ひ、後に伊邪那岐神、先ず「あやにや し、なをこと」と詣り賜ひき。　然れど、 各詣り賜ひ覚へて後に、其の妹に、「女人を言ふ賜ひき。 もへなずに興して、御子蛭子を生み賜ひき。　然れど、 に淡島を生み賜ひき。　是も御子の例には入らず。

◆現代語訳文

そこで伊邪那岐神は、『それならば、我とお前とで、この天の御柱を行き廻り、出会ったところで美斗能麻真波比を為そう』とおっしゃった。そして、そう言って契るとすぐに、『お前は右側より廻り合うぞ、我は左より廻り合われた。』お二方の神は、契り終えるとすぐに、往き廻り、廻り合われたところで、『ああ、なんて素晴らしい乙女なのだ！』と言い、それに続けて伊邪那岐神、『ああ、何という素晴らしい乙女なのだ！』お なぜなら、それぞれが言い終えた後に、妹に告げたことには、『おなじ上めることは出来ないと思えて、その まま秘め処に麻真波比なされて、何とお生みになったのだ。この子らは子供の数には入れないのじゃ。

◎ヒゲ・ムーブ

是に二柱の神、議云りて曰ひしく、「今、吾 既に国を生めり。　何か生めるか。」　答へて曰ひしく、「吾が生めるは、 淡路島の穂の狭別島。

①おりとえり　②あなにやしや　③女人（おみな）

そして、伊邪那岐神は、『それならば、我とお前とで、この天の御柱を行き廻り、出会ったところで美斗能麻真波比を為そう』とおっしゃった。そして、そう言って契るとすぐに、『お前は右側より廻り合うぞ、我は左より廻り合われた。』お二方の神は、契り終えるとすぐに、往き廻り、廻り合われたところで、『ああ、なんて素晴らしい乙女なのだ！』と言い、それに続けて伊邪那岐神、『ああ、何という素晴らしい乙女なのだ！』お なぜなら、それぞれが言い終えた後に、妹に告げたことには、『おなじ上めることは出来ないと思えて、その まま秘め処に麻真波比なされて、何とお生みになったのだ。この子らは子供の数には入れないのじゃ。

◎ヒゲ・ムーブ

是に二柱の神、議云りて曰ひしく、「今、吾 既に国を生めり。　何か生めるか。」　答へて曰ひしく、「吾が生めるは、 淡路島の穂の狭別島。

①おりとえり　②あなにやしや　③女人（おみな）

是に伊邪那岐神、「然らば吾と汝と、是の波比為なる」と詣り賜ひき。　斯へ言い期りて、是の より廻り逢はむ」と詣り賜ひ、乃ち「汝は右より廻り逢へ。　吾は左り しそなたちと言い賜ひ、後に伊邪那岐神、先ず「あやにや し、なをこと」と詣り賜ひき。　然れど、 各詣り賜ひ覚へ後に、其の妹に、「女人を言ふ賜ひき。 もへなずに興して、御子蛭子を生み賜ひき。　然れど、 に淡島を生み賜ひき。　是も御子の例には入らず。

◆現代語訳文

そこで伊邪那岐神は、『それならば、我とお前とで、この天の御柱を行き廻り、出会ったところで美斗能麻真波比を為そう』とおっしゃった。そして、そう言って契るとすぐに、『お前は右側より廻り合うぞ、我は左より廻り合われた。』お二方の神は、契り終えるとすぐに、往き廻り、廻り合われたところで、『ああ、なんて素晴らしい乙女なのだ！』と言い、それに続けて伊邪那岐神、『ああ、何という素晴らしい乙女なのだ！』お なぜなら、それぞれが言い終えた後に、妹に告げたことには、『おなじ上めることは出来ないと思えて、その まま秘め処に麻真波比なされて、何とお生みになったのだ。この子らは子供の数には入れないのじゃ。

◎ヒゲ・ムーブ

是に二柱の神、議云りて曰ひしく、「今、吾 既に国を生めり。　何か生めるか。」　答へて曰ひしく、「吾が生めるは、 淡路島の穂の狭別島。

①おりとえり　②あなにやしや　③女人（おみな）

是に伊邪那岐神、「然らば吾と汝と、是の波比為なる」と詣り賜ひき。　斯へ言い期りて、是の より廻り逢はむ」と詣り賜ひ、乃ち「汝は右より廻り逢へ。　吾は左り しそなたちと言い賜ひ、後に伊邪那岐神、先ず「あやにや し、なをこと」と詣り賜ひき。　然れど、 各詣り賜ひ覚へ後に、其の妹に、「女人を言ふ賜ひき。 もへなずに興して、御子蛭子を生み賜ひき。　然れど、 に淡島を生み賜ひき。　是も御子の例には入らず。

◆現代語訳文

そこで伊邪那岐神は、『それならば、我とお前とで、この天の御柱を行き廻り、出会ったところで美斗能麻真波比を為そう』とおっしゃった。そして、そう言って契るとすぐに、『お前は右側より廻り合うぞ、我は左より廻り合われた。』お二方の神は、契り終えるとすぐに、往き廻り、廻り合われたところで、『ああ、なんて素晴らしい乙女なのだ！』と言い、それに続けて伊邪那岐神、『ああ、何という素晴らしい乙女なのだ！』お なぜなら、それぞれが言い終えた後に、妹に告げたことには、『おなじ上めることは出来ないと思えて、その まま秘め処に麻真波比なされて、何とお生みになったのだ。この子らは子供の数には入れないのじゃ。